

ダニエルの書 - 第百九十六号

預言的な平行関係と神の失望：黙示録10章における終末の神の民の啓示の旅路

Jeff Pippenger

2024-04-27

第一と第二の天使のメッセージの歴史が表されている黙示録第十章において、神の終末の民の象徴としてのヨハネは、彼が象徴的に表している歴史の中に失望が生じることを前もって告げられた。そして、その失望こそが、ミラー派の信仰を試すためにミラー派の理解には封印されていた、第一と第二の天使のメッセージの歴史の要素であった。

そして、私が天から聞いたあの声が、再び私に語って言った。「行って、海と地の上に立っている天使の手に開かれている小さな巻物を取りなさい。」私はその天使のところへ行って、「その小さな巻物をください」と言った。すると彼は私に言った。「それを取って食べなさい。あなたの腹は苦くなるが、口には蜜のように甘いであろう。」私は天使の手からその小さな巻物を受け取り、食べた。すると、それは私の口には蜜のように甘かったが、食べ終わるとすぐに腹は苦くなった。黙示録 10:8-10.

10節において、ヨハネは、1840年8月11日、強い御使いが手に小さな巻物を持って降りてきた時から、1844年10月22日の大失望に至るまでの歴史を表している。彼がその歴史を象徴的に示す前に、彼は「天から聞いた声」によって、小さな巻物を食べる時「それはあなたの腹を苦くするが、あなたの口には蜜のように甘い」と告げられる。その苦い失望こそがミラー派の信仰を試したのであり、彼らとその失望の到来前にそれを知っていることは彼らにとって最善ではなかった。しかしヨハネは、第一と第二の天使のメッセージの歴史を成す出来事の区分に関わる事実を知っていることを求められている終末時代の民を表している。

その聖なる歴史は、終末の民に試練がもたらされること、そしてそれが、彼らが試練に先立って理解しておかない方がよい何かに基づく試練であることを示している。しかしそれはミラー派の者たちのまったく同一の経験ではなかったものの、第一天使と第二天使によって示された出来事の描写とは完全に一致していた。というのも、七つの雷鳴も「順序に従って明らかにされる将来の出来事」を表しているからである。

ミラー派の土台となる歴史を知っておくことは求められているが、神の終末の民はミラー派と同様の出来事の流れを成就するだろう。しかし、ミラー派を試したもの-彼らにとっては前もって知らない方が最善であった-とは異なる試練が、ユダ族の獅子がイエス・キリストの黙示の封印を解くべき時が到来するまで封じられていた要素によってもたらされ、それはダニエル書11章40節の隠された歴史の中で起こる。

封印されたものは、神の終末時代の民を試すために意図されており、その試練はミラー派が試された道標と一致するものであった。というのも、ミラー派の歴史における最初の成就であれ、終わりの時の最終的な成就であれ、「七つの雷」は「出来事の描写」であり、「それらが順序どおりに明らかにされる」ものであったからである。

広く認識されてこなかったのは、ヨハネが、1840年8月11日に小さな巻物を携えて降臨したキリストから1844年10月22日の大失望に至る歴史を象徴しているのと同様に、その同じ歴史が1844年4月19日に第二の天使の降臨によっても表されていた、という点である。第一の失望は、ヨハネの失望として理解できる。すなわち、彼は1840年8月11日に小さな巻物を食べ、その後1844年4月19日に失望に遭遇したのである。その失望が訪れたとき、第二の天使が手に「文書」を携えて降臨した。

さらにもう一人の力強い天使が地上に下るよう命じられた。イエスはその手に一巻の書をお与えになり、彼が地上に来たとき、彼は「バビロンは倒れた、倒れた」と叫んだ。すると私は、失望した人々が再び天に目を上げ、信仰と希望をもって主の現れを待ち望むのを見た。しかし多くの者は、まるで眠っているかのように、鈍い状態のままであるように思われた。けれども彼らの顔には深い悲しみの影が見て取れた。失望した人々は、聖書から、自分たちが遅延の時にあり、幻の成就を忍耐して待たなければならないことを悟った。彼らを1843年に主を待ち望むに至らせたのと同じ証拠が、1844年には主を期待するように彼らを導いた。けれども私は、大多数が、1843年の彼らの信仰を特徴づけていたあの勢いを持ってはいないのを見た。彼らの失望が、その信仰の勢いをそいでしまっていたのである。初期の著作、247。

第十章でヨハネが示しているミラー派の歴史は、第一の天使の歴史であり、また第二の天使の歴史でもある。メッセージを携えて降臨した第一の天使と、メッセージを携えて降臨した第二の天使は、それぞれ失望に終わることになる歴史の始まりを画しているが、ヨハネはより直接的に両天使の歴史全体を描写している。1844年10月22日に第三の天使がメッセージを携えて到来した後でさえ、1863年の反逆による失望は、メッセージで始まり失望で終わる期間に対する第三の証しとなっている。

2020年7月18日における第三天使の運動の最初の失望は、ミラライトたちの最初の失望に並行するものであった。ある真理は封じられていたが、それは、1844年の真理が、いくつかの数値の誤りの上に主が御手を置かれたことによって封じられていたのと同様であり、そのためにミラライトたちの最初の失望が生じた。やがてその誤りが理解されたとき、ユダ族の獅子が御手を取り除かれたので、その封印は解かれた。2020年7月18日の誤りは、1844年10月22日に「時はもはやない」と宣言されたとき、御手が退けられていたことを認めることを拒んだことによってもたらされた。

それが、第一の天使の最初の失望に関わるフィラデルフィア運動であれ、第三の天使のラオデキア運動の最初の失望であれ、主の御手は道標を表している。1844年4月19日と2020年7月18日に、その失望は離散の時をもたらした。1840年8月11日または2001年9月11日に集められていた人々は散らされ、その後、キリストはご自分の民を二度目に集め始めた。

彼は2001年9月11日から民を集め始めた。というのも、キリストの洗礼が示すように、神の象徴が下るときこそ彼は弟子たちを集め始め、それ以前ではないからである。それから、離散の後に、キリストは二度目にご自身の民を集める。キリストはご自身の洗礼のときから弟子たちを集め始め、十字架によってもたらされた離散の後、再び弟子たちを集め始めた。2023年7月に始まった第二の集めという予言的事実は、2020年7月18日に封じられていたものの一部であったが、それは明らかにミラー派の歴史の一要素であった。

ダニエル書11章40節において、底なしの淵から上ってきた獣が現れ、2020年に地の獣の両の角を打ち滅ぼした。2023年7月に、主は終わりの日の民を二度目に集め始められた。集めるという過程は聖なるミラー派の歴史の中に表されており、その歴史の中には、主が御自分の民を二度目に集められることについての二つの歴史的証しがある。この集めの過程は、2023年7月まで封印されていた預言的要素である。主が御自分の民を二度目に集める働きは、ウクライナ戦争の歴史の中で、七人に属する第八の大統領の再選の直前に成就する。

1840年8月11日、主はミラー派運動を集め、その集結は、1842年5月に刊行された1843年の図表が導入されたことによって印づけられた。その図表は土台となるメッセージを表していた。というのも、その時、主はミラー派の神殿の土台を据えておられたからである。1840年8月11日における黙示録第10章の天使の降臨は、キリストの洗礼に対応しており、それは他のことがらとともに、キリストの弟子選びの始まりを画した。

ヨハネ、アンデレ、シモン、そしてピリポとナタナエルが召されたことによって、キリスト教会の礎が据えられ始めた。ヨハネは自分の弟子のうち二人をキリストのもとへ導いた。すると、その一人であるアンデレが自分の兄弟を見つけ、彼を救い主のもとへ招いた。続いてピリポが召され、彼はナタナエルを探しに行った。The Desire of Ages, 141.

1798年の「終わりの時」から1840年8月11日に至るまでのウィリアム・ミラーの働きは、バプテスマのヨハネの働きを象徴していたが、キリストの洗礼の際に聖霊が下ったことによって象徴されているように、黙示録10章の天使が降りて来たとき、主は土台となる弟子たちを「集め」られた。この二人の証人は、黙示録18章の天使が降りて来た2001年9月11日に、キリストが終末の民を集められたことを示している。しかしミラー派と同様に、封じられていた七つの雷の一要素によって彼らは試みられることになっており、その後、主は二度目にご自分の民を集められるのである。

神の終末の民の第二の集結は、ダニエル書11章11節のまさに末尾で示されている歴史の中で始まった。そこはプーチンのウクライナに対する勝利の直前であり、またロシアとプーチンの予言的証しが終わる12節の直前でもある。したがって、ダニエル書11章11節は黙示録11章11節と一致している。というのも、そこでは二人の証人が再び命を与えられるからである。

ミラー派の聖史において、主は1844年4月19日の失望の後、二度目にご自分の民を集め始められた。そして当時、主がご自分の民を集めるために用いられたのは、彼らがマタイによる福音書25章の十人の乙女のたとえにおける「花婿の来るのが遅れた」時、ならびにハバクク書2章を成就しているという認識であった。ミラー派の人々が自分たちの状態を認識して立ち返るためには、神の預言のことばのうちに自分たちが表されていることを認めなければならなかった。彼らは、自分たちが神の民であり、神の民であると称する者たちと対照をなす存在であることを見いだす必要があった。主が失望したご自分の民を集められるにあたっては、異邦人に掲げられる旗印の実例が示され、こうして、真実でありながら失望したご自分の民と、単に公言しているにすぎない民との区別が強調された。

その日、エッサイの根が民のための旗印として立ち、異邦人はそれを求め、その安息は栄光に輝く。その日、主は再び、二度目に御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、そして海の島々から、残されているご自分の民の残りの者を取り戻される。主は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追い散らされた者を集め、地の四隅からユダの散らされた者を集められる。イザヤ書 11:10-12.

預言者エレミヤが1844年4月19日に失望した人々を代表しているとき、彼は、自分がもはや「あざける者の会衆」とは交わらないことを明らかにしたが、その会衆は、1843年の成就しなかった予言を、エレミヤが代表する人々が偽預言者であることの証拠として用いていた。

私はあざける者たちの集いに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、私はひとりで座っていた。あなたが私を憤りで満たされたからだ。エレミヤ書 15:17.

「あざける者の集会」は、エレミヤに代表される人々を追放していた。

多くの人々が、不信仰な同胞たちから迫害を受けた。教会における自分たちの立場を保つために、自らの希望について沈黙することに同意した者もいたが、神への忠誠は、神が彼らに委ねた真理をそのように隠すことを自分たちに禁じている、と感じた者たちもいた。キリストの来臨を信じていると表明したという、ただそれだけの理由で、教会の交わりから断たれた者も少なくなかった。この信仰の試練に耐えた人々にとって、預言者の次の言葉はきわめて貴重であった。「あなたがたを憎み、わたしの名のためにあなたがたを追い出したあなたがたの同胞は、『主は栄光を現される』と言った。しかし主はあなたがたの喜びとなって現れ、彼らは恥を見る。」イザヤ書66章5節。『大論争』、372.

主が異邦人に旗印を掲げるのは、彼の民の残り、すなわちイスラエルの追放された者たちを集めるために、主が再び御手を伸ばされたときである。彼らは、もはや「あざける者の集会」に座ることはない。

「エッサイの根」は、ユダヤ教に属する血統とユダヤ教の外からの血統という二つの血筋の象徴であり、それはイエスの血統を表すだけでなく、神性と人性の結合の象徴でもある。掲げられる旗じるしは、神性と人性の結合という状態と経験のうちに永遠に封印された民を表しており、そのことはダニエル書11章10節でも「とりで」という象徴で示されている。10節では、「とりで」は頭を指すという預言的理解から、十四万四千人の封印の時が示唆されている。11節の歴史とウクライナ戦争において、主は失望した追放者たちを集めるために二度目に御手を伸ばされる。

それゆえ、ダニエル書11章の証言を骨組みとして、私たちは日曜法の直前に教皇権が預言的歴史に介入することを特定した。私たちは、トランプによって表される共和の角の働きを見てきた。彼は七人に属する第八となり、教会と国家を結合させる働きを始める。また、マカバイ家によって表されるプロテスタントの背教的な角のラインもある。同じくそれらの節が示す歴史の中で、私たちは七つの雷のラインを適用するが、それはまた十人の乙女のたとえのラインでもあり、十四万四千人の経験を明らかにするとともに、真のプロテスタントの角の働きを概説する三人の天使のラインでもある。その歴史における真

のプロテスタントの角の出来事の一つは、第二の集結である。

第二の集めは第二の天使のメッセージの歴史の中で起こり、また1844年から1863年に至る第三の天使の歴史の中でも起こり、主がご自分の散らされた群れを集めるために再び御手を伸ばされたことについて、ミラー派の歴史から二つの証しを確立した。

9月23日、主は、ご自分の民の残りの者を回復するために二度目に御手を伸ばされたこと、そしてこの集めの時には努力を倍加しなければならないことを、私に示された。散らされていた時にはイスラエルは打たれ、引き裂かれたが、今や集めの時には、神はご自分の民をいやし、その傷を包んでくださる。散らされていた時には、真理を広めるための努力はほとんど効果がなく、わずかし、あるいは何も達成しなかった。しかし、集めの時、神がご自分の民を集めようと御手を伸ばしておられるときには、真理を広める努力は目的どおりの効果をもたらす。すべての者は一致して、この働きに熱心であるべきである。私は、今や集めの時にある私たちを導く模範として散らしの時を引き合いに出すのは誤りであることを見た。というのも、もし神が今、当時なされた以上のことを私たちのためにしてくださらないなら、イスラエルは決して集められることはないからである。Early Writings, 74.

『初期の著作』の付録で、シスター・ホワイトは先に引用した発言を説明している：

3. 74ページにある、主が「ご自分の民の残りの者を回復するために再び御手を伸ばされた」という幻は、キリストを待ち望んでいた者たちの間にかつて存在していた一致と力、そして主が再びご自分の民を一致させ、起こし始められたという事実とにのみ言及している。『初期の著作』86ページ。

1840年8月11日から1844年10月22日までを表す七つの雷の聖なる歴史は、1844年10月22日から1863年の反乱に至るまでの聖なる歴史を予表していた。行に行を重ねて言えば、第一の歴史は賢いおとめたちの例を示し、第二の線は愚かなおとめたちの例を示している。どちらの歴史も、食べるよう命じられたメッセージを携えた天使が降りてきたときに始まった。両方の歴史における天使の到来は、離散をもたらす試練の過程を開始し、1849年までには、ホワイト姉妹は、主がその御手を再び、二度目に伸ばし、今度は1844年10月22日に散らされた者たちを集めようとしておられることを示されていた。

彼らは大失望によって散らされていた。ちょうど、1844年4月19日に賢い者たちが最初の失望によって散らされたのと同様に、第二の集いは、主が「再びご自分の民を一つにし、起こし始めた」ことを明らかにした。第二の集いにおいて、主の業には、メッセージにおいて互いに一致し、その人性が主の神性と結ばれている旗印を掲げることが含まれる。その旗印の目的は、神のほかの群れをバビロンから呼び出すことであり、それは男女がその旗印を見ることによって成し遂げられる。

旗印とは、日曜法の試練の時に、自らの人性をキリストの神性と結び合わせた者たちの軍勢である。ゆえに、第二の集結は「エッセイの根」を指し示し、それが高く掲げられ、異邦人であったルツの二重の予言的象徴を帯びている。彼女は旗印によって集められ、ボアズと結び合わされる。ボアズは十四万四千人の象徴であると同時に、ルツのために代価を支払い、彼女の近親者であった贖い主の象徴でもある。キリストの神性が人間性の墮落した肉と結合して受肉されたことにおいて、主は私たちの近親者となられた。掲げられる

旗印とは、そのメッセージによって一つにされた者たちであり、日曜法に先立って、自らの人性をキリストの神性に結び合わせる業を完成させる者たちである。

次回の記事でこの研究を続けます。

聖書への理解は、研究すればするほど深まる。学ぶ者がどちらを向いても、神の無限の知恵と愛が示されているのを見いだすだろう。

ユダヤ教の制度の重要性は、まだ十分には理解されていない。その儀式と象徴には、広大で深遠な真理が暗示されている。福音は、その奥義を開く鍵である。贖いの計画を知ることによって、その真理は理解に開かれる。私たちは今している以上にはるかに、これらのすばらしい主題を理解するという特権を与えられている。私たちは神の深い事柄を悟るべきである。砕かれた心で神の言葉を探し求め、ただ神だけが与えることのできる知識の長さ、幅と深さと高さがいっそう増し加えられるよう祈っている人々に啓示されている真理を、天使たちでさえつづきに見たいと願っている。

この世の歴史が終わりに近づくとつれて、終わりの時に関する預言は、とりわけ熱心に学ぶことが求められます。新約聖書の最後の書は、私たちが理解すべき真理に満ちています。サタンは多くの人々の心を目をくらませ、彼らが黙示録を学ばないためのどんな口実でも喜んで受け入れるようにしてきました。しかしキリストは、ご自分のしもべヨハネを通して、終わりの日に何が起こるのかをここに宣言され、こう言われます。「この預言のことばを読む者、これを聞く者、またその中に書かれていることを守る者は幸いである。」黙示録 1:3。

キリストは言われた。「『永遠のいのち』とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを彼らが知ることです。」ヨハネ17:3。なぜ私たちはこの知識の価値を悟らないのでしょうか。なぜこれらの栄光に満ちた真理が、私たちの心のうちに燃え輝き、唇にまでこみ上げ、私たちの全存在に行きわたらないのでしょうか。

神は私たちに御言葉を与えることによって、私たちの救いに不可欠なあらゆる真理を私たちのものとしてくださった。幾千もの人々がこのいのちの泉から水をくみ取ってきたが、それでも尽きることがない。幾千もの人々が主を自分たちの前に据え、仰ぎ見ることによって同じ御姿に変えられてきた。彼らが御性質について語り、キリストが自分たちにとって何であり、自分たちがキリストにとって何であるかを語る時、彼らの霊は内に燃え立つ。しかし、こうした探求者たちでさえ、これらの壮大で聖なる主題を尽くし切ったわけではない。さらに幾千もの人々が、救いの奥義を探り求める働きに携わることができる。キリストの生涯とその使命の性格を深く思い巡らすとき、真理を見いだそうとする試みのたびに、光の輝きはますますはっきりと放たれるだろう。新たな探求のたびに、これまでに明らかにされてきたものを超えて、さらに深く心を引きつける何かが示される。この主題は尽きることがない。キリストの受肉、その贖いの犠牲と仲保の働きの学びは、時の続くかぎり、勤勉な学び手の思いを占め続けるだろう。そして、数えきれない年月をもつ天を仰ぎ見て、彼は叫ぶだろう、「敬虔の奥義は大いなるかな」と。

永遠において、私たちは、もしこの地上で得ることができたはずの啓示を受けていたら、私たちの悟りを開いていたであろう事柄を学ぶことになる。贖いの主題は、永

遠の世々にわたり、贖われた者たちの心と思いと言葉を占め続ける。彼らは、キリストが弟子たちに明らかにしたいと切に望まれたのに、彼らにはそれをつかみ取る信仰がなくて悟ることのできなかつた真理を、悟るようになる。いつまでも、さらにいつまでも、キリストの完全さと栄光についての新たな見方が現れ続ける。尽きることのない世々を通して、忠実な家の主人は、その宝から新しいものと古いものを取り出される。『キリストの実物教訓』 132-134頁。